

ずいぶん春めいて、近畿各地では、来週にも桜の開花が予想されています。とは言え、大阪ではインフルエンザ警報も発令中です。ご注意ください。現在会員登録数 1,908 人さま。次号は 4 月 20 日発行の予定です／

◆◆◆ 目次 ◆◆◆

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》読書活動ボランティアのためのワンポイント 67

《4》行って来ました！

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

【1】お知らせ

●「第32回 日産 童話と絵本のグランプリ」入賞作品決定

全国のアマチュア作家から寄せられた創作童話 2,414 編、絵本464 編、計 2,878 編の中から、入賞作品 38 編を決定しました。

・童話の部大賞『日曜日の小さな大冒険』愛川 美也（あいかわ みや）さん

・絵本の部大賞『ちかしつのなかで』横須賀 香（よこすか かおり）さん

上記の2作品は、後日、絵本として出版されます。

◇入賞作品展 3月27日（日）まで開催中

大阪府立中央図書館 1階エントランスおよび国際児童文学館展示コーナー

開催日・時間は、上記館の開館日、時間に準じます／ 入場無料

[http://www.iiclo.or.jp/07\\_com-con/02\\_nissan/index.html](http://www.iiclo.or.jp/07_com-con/02_nissan/index.html)

● 寄付金を募集しています

当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。ぜひ、ご協力いただきますようお願いします。

お申し込み、詳細は → <http://www.iiclo.or.jp/donation.html>

【2】コラム

\*\*\*\*\*

《1》この本読んだ？ Yasuko's & Takeo's Talk

\*\*\*\*\*

『リクと白の王国』田口ランディ/著 キノブックス 2015年10月

対象年齢：小学校中学年以上

あらすじ：小学5年生のリクは、母が3年前に亡くなり、精神科医の父と二人暮らし。東日本大震災前に父の福島への転勤が決まっており、父と震災直後の5月から福島で生活を始める。冬休みに北海道で年下の子どもたちと野村さんの家で過ごすなかで、トンチという15cmの山の化身に出会い、福島で生活することの意味を考えられるようになる。

T：東日本大震災から5年たってこの本が出版された意義は大きいと思って読みました。

Y：主人公のリクは、震災直後に福島に引っ越してくることによって、それまで住んでいた宇都宮と福島を客観的に見る視点を持つことができます。

T：設定がうまい。渦中に飛び込み、その状況を10歳の子どもの視点で描く。右往左往する大人たちの無責任な発言や情報のない中で、振り回され、疲弊していく子どもたちの様子がよくわかります。

Y：また、横浜にいる叔母の放射線に対する心配が、福島周辺にいる人々への反応の一つの典型として巧みに描かれています。

T：それらが観念論としてではなく、例えば、マスクを着けるのはうっとうしいけれど、「顔を隠したら心を隠すみたいで楽になった」というような具体的で微妙な心理を描いているところに、この作品の説得力があると思いました。

Y：リクが体験する場所として、福島、横浜や宇都宮に加えて、冬休みに「白の王国」＝北海道に行きます。

T：北海道で会う大人たちが魅力的です。また、リクは雪の中でトンチという小鬼に出会います。ファンタジー作品としてもリアリティを感じました。

Y：雪の白と冒頭で出てきた亡くなった母親が植えたという赤のゼラニウムの色の対比も印象的でした。

T：構成も巧みです。冒頭、リクが引っ越す前にもらった少女からの手紙に、どうしても返事が書けなかったのが、結末ではリクの心の中の整理ができた象徴として少女に返事を書いて送ります。

Y：この作品に読み応えがあるのは、震災のこのみを取り上げた作品ではなく、リクが母の死を受け入れていく過程の物語としても描かれている点にあると思いました。「死」は、津波で亡くなった人の死、死の恐怖におびえる人間たちなど、この作品に流れる普遍的なテーマになっています。

T：結末で、リクは福島に踏みとどまることを決意するという点で作家の考えを読み取ることはできますが、この作品の一番の価値は、リクという人物を創作することで、福島について子どもの視点で考える場所を開いたということにあると思いました。多くの人に読んで欲しいです。

\* 今回のゲストは当財団の宮川健郎理事長（T）です。

\*\*\*\*\*

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

\*\*\*\*\*

第7回「祭の晩」

人間と神々 衰微する聖なる交換のかたち

<「山男だ、山男だ。」みんなは叫んで、がやがやあとを追おうとしました

が、もうどこへ行ったか、影もかたちも見えませんでした。

風がごうごうっと吹き出し、まっくろなひのきがゆれ、掛茶屋のすだれは飛び、あちこちのあかりは消えました。>

山の神の秋祭りの晩、亮二は奇妙な男に出会います。骨ばって赤い顔、まん円で煤けたような金色の眼。その男が銭を持たずに団子を二串食べ、掛け茶屋の主人や野次馬に責められて困っているとき、亮二は自分のお金を差し出します。男はそのお金を置いて風のように去って行きます（冒頭の描写参照）。

賢治の作品には、異界の住人ともいべき存在が多く登場します。前回の「かしわばやし之夜」に登場した「かしわの木大王」は（山の神の具象化された姿）（赤坂憲雄）とされますが、他の作品にもしばしば登場する山男も神の側の存在ということでしょう。

本作を読むうえでの重要な場面に、純朴な山男と掛け茶屋の主人とのやりとりがあります。無銭飲食の山男は、団子二串の代わりに薪百把、栗を八斗返すと言います。人間世界の価値観では通用しないこの等価交換に、主人はかえって馬鹿にされたと思い、山男を怒鳴りちらします。

山男（神）と主人（人間）の間には成立しない交換の原理。赤坂憲雄（民俗学）は、山の神の秋祭りの晩という限られた時空に金色の眼の山男が登場してくることに注目し、この不均衡な交換は人間と神の間にかろうじて受け継がれてきた、山の神信仰という秘められた聖なる交換のかたちであると指摘しています。（「山の神の祭り」1993年）

かつて存在した、人間と神々をつないできた儀礼の数々。祭の晩は、そうした信仰を具現する場であったはずですが。しかしこうした（儀礼の衰弱と形骸化）が、この聖なる交換を理解不能なものとする一方で、少年・亮二と祖父がその断絶をかりうじて修復するかのように手を差しのべます。約束通り、薪と栗を持ってきた山男との交換成立に読者は安堵しながらも、かしわの木大王、そして木たちと清作との対立をみる（本メルマガ前号参照）とき、それがつかの間のものでしかないことを痛感させられるのです。（ペ吉）  
（本文の引用は、新潮文庫『新編 風の又三郎』によりました。）

\*\*\*\*\*

### 《3》 読書活動ボランティアのためのワンポイント 67

\*\*\*\*\*

#### その9 おはなしを語る（4）語るポイント6

おはなしを語る中で、語り口も重要な要素です。

時々、語り口にくせのある人に出会います。くせと個性の区別は難しいところですが、どんなおはなしを語っても同じように語ってしまうのはくせ、それぞれのおはなしのおもしろさを語り手らしく伝えられるのが個性と言えるのでしょうか。

声を鼻にかける、語尾を上げる、語尾を発音しない、「えー」という言葉をはさんでしまうなど、いろいろなくせが挙げられます。これらは聞いている

人には聞き苦しく感じられます。特に、声を鼻にかけるくせの場合、それによって、聞いている人を感動させようという意図が感じられる時があり、聞く気が削がれます。

また、声の出し方にくせがある人もいます。例えば、登場人物の会話を表現するのに、口を丸めて口の中で音をこもらせたり、のどの奥の方で出したり、口先だけでもごもごと語るくせなどがあります。語っている人は、いろいろな声を出そうとしているのかもしれませんが、息を体の中にためて語ると、声が外に出ないので聞き苦しくなります。どんな時も息をはきながら語ることが大切です。

声の大小も大切です。怖い話をするときに、声を潜めようとして、音を出さない人がいますが、聞こえないだけでなく、その声が続くと聞き手は疲れてきます。音は出しても静かに聞こえる声を見つける必要があります。

逆に、ずっと大きな声で語り続けると、語り手はがんばった気持ちになるかもしれませんが、やはり、聞き手は飽きて疲れてしまいます。時に、緊迫感のあるおはなしを、大きな声でたたみかけるように語る人がいますが、おはなしにもよるものの、静かに落ち着いて語りながら、速さに緩急をつける語りの方が、ひたひたと迫ってくる緊張感は伝わるように思います。

おはなしの盛り上がりを念頭に置いて、自分の語りを客観的に見る目をいつも自分の中に持つておくこと、落ち着いて語ることが重要です。

\* 次号は「その9 おはなしを語る（4）語るポイント7」の予定です。  
質問や意見をいただきましたら、お答えしていきたいと思います。（Y）

\*\*\*\*\*

《4》 行って来ました！

\*\*\*\*\*

滋賀県立近代美術館で3月27日まで開催されている「ビアズリーと日本」  
に行ってきました。

オーブリー・ビアズリー（1872-1898）は、19世紀末のイギリスで脚光を浴びた画家で、オスカー・ワイルドの戯曲『サロメ』の挿絵が有名です。ビアズリーと日本のイラストレーションはお互いに影響を受けていると言われていますが、この展覧会ではその両方のイラストレーション、版画、装幀本などが約270点展示されています。

前半はビアズリーの作品です。25歳で亡くなる6年ほどの間に創作されたたくさんの作品が紹介されています。『サロメ』やサー・トマス・マロリー著『アーサー王の死』、雑誌「ステューディオ」「イエロー・ブック」「サヴォイ」などに描かれた挿画の原画や、掲載された本が数多く展示されています。

白黒で描かれた絵は、細かい線で緻密に描きこまれていて、とても美しいと思いました。耽美で官能的でオカルト的な絵に引きつけられて見飽きません。ビアズリーが影響を受けた、日本の文様や北斎漫画や歌川芳藤の猫のおもちゃ

絵や花魁の浮世絵なども展示されていて、ビアズリーの絵の中に日本を感じることができました。

後半は、日本でのビアズリーの影響が紹介されています。武者小路実篤らが1910年に創刊した文芸雑誌「白樺」の1巻3号で、柳宗悦によってビアズリーが紹介されたのが日本人の目に触れるきっかけだそうです。いろいろな日本の作家が描いた絵や版画のサロメも集められていて、見比べることができておもしろかったです。

影響された作家として、その時代の子どもの本や少女雑誌にも描いていた高畠華宵や落谷虹児、茂田井武などの作品や、谷崎潤一郎著『人魚の嘆き』の挿画の水島爾保布なども挙げられていました。

100年以上たった今の日本のイラストレーションの中にもビアズリー的なものも多く見つけられるなと思いつつ帰りました。(K)

---

### 【3】全国のイベント紹介

---

#### ● 大阪国際児童文学館を語る会・考える会 in 由布

第1部 記念講演「ふしぎと楽しい絵本と紙芝居」

講師：長野ヒデ子（絵本作家）

第2部 大阪府立中央図書館 国際児童文学館の紹介とPR

第3部 トーク&トーク「子どもの本 いま・これから」

パネリスト：長野ヒデ子（絵本作家）

松本則子（人形劇団クラルテ 全国青少年演劇協議会運営委員長）

笠崎まゆ（大分児童文学と科学読物の会会員）

斉藤由美子（子どもと本の部屋エルマー代表）

コーディネーター：脇谷邦子（元 大阪府立図書館司書）

日時：4月10日（日）午前10時～午後4時

場所：クァージュゆふいん（湯布院健康温泉館）（大分県由布市）

参加費：有料 申込み：必要

主催：大阪国際児童文学館を育てる会 / 由布市子ども文庫連絡会

#### ● 第26回 箕面手づくり紙芝居コンクール 作品募集

募集期間：4月15日（金）～5月15日（日）必着

募集規定：アマチュアの手作り作品に限る、ほか

募集部門：・ジュニアの部（作者・画家・演者とも小学生・中学生の作品）

・一般の部A部門（当コンクール入賞経験者）

・一般の部B部門

主催：箕面市教育委員会 / 人と本を紡ぐ会

問合せ：箕面市立西南図書館「モモ 人と本を紡ぐ会」事務局

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

[http://www.iiclo.or.jp/03\\_event/04\\_other/index.html](http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html)

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

---

#### 【4】プレゼント

今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『リクと白の王国』を1名の方にプレゼントします。ご希望の方は、メールで件名「メルマガ NO.67プレゼント希望」とし、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ(5)このメルマガのご感想 をお書きのうえ office@iiclo.or.jp にお送りください。

締切は4月11日(月)、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |

ケータイの利用は、1に時計、2にメール、3に通話で、あとは週2回程の特急指定席の予約だけ。だからガラケーで十分、だった。ところが、今月からセキュリティ上の理由とかでガラケーでは特急の予約ができなくなった。いよいよガラパゴスは絶滅危惧種となり、1億総スマホ化に向かっている。大幅な負担増に「なんでやねん！」とツツコムものの、意地を通せば窮屈だ。とにかく人の世は住みにくい…。(A)

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いします。原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

- このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。
- 配信の登録・解除・変更は、  
[http://www.iiclo.or.jp/m1\\_magazine/index.html](http://www.iiclo.or.jp/m1_magazine/index.html) パソコンからどうぞ
- このメールの送信アドレスは配信専用です。
- 記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>  
〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内  
TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp